



上智大学創立 100 周年
上智短期大学創立 40 周年
上智社会福祉専門学校 50 周年



教皇ヨハネ・パウロ二世の来訪

No. 20

1. 上智大学訪問が夢だった

ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、1981年2月25日の午前7時20分に本学を訪れた。挨拶の中で教皇が「日本に行くことができたなら、ひとつはマクシミリアン・コルベ神父が働いていた場所を見に行くこと、そしてもうひとつは上智大学を訪問することが生涯の夢であり願いであった」と述べると、約400人で埋まった会場はど



教皇の訪問は予定されていなかった(7号館14階)

っと沸いた。教皇がいかに上智大学に「期待」を寄せていたかに、皆心躍らせた。そこで教皇は、上智大学の英語名称である「ソフィア」について触れ、「ソフィア」というのは旧約聖書では「期待」という意味を持つ言葉であると説明して、最後に「私は上智大学のみなさんが、アジアの国民のために奉仕してくださることを期待する」と、貧しい人や飢えている人に関心を持つように訴えかけた。わずか20分間の出来事であったが、集まった教職員や学生、熱心な

信者、ほかに大学や教育行政関係者など約400人が教皇を熱烈に歓迎した。



右はヨゼフ・ピタウ学長(当時)

教皇は、日本滞在4日間、原爆罹災地である広島・長崎の訪問など、さまざまな行事をこなされていた。そのなかに上智大学の訪問は、当初、プログラムになかった。ピタウ学長(当時)の『ニッポン人への熱い手紙』(日本リクルート出版部、1982年)によると、教皇来日の2月23日に羽田空港に学長が出迎えたとき、次のような会話が交わされたという。「法王様、実は上智でみんな待っています。しかし、プログラムのなかに入っていないので、なかなか難しいでしょうね」。「いや、プログラムは私がつくるはずだよ」と、教皇一流のユーモアでそうおっしゃった。「えっ、本当ですか。それでしたら、ぜひ

いらしてください」。こうしてピタウ学長が、教皇歓迎実行委員会や警備に当たる警視庁などに働きかけて実現した。その後、ピタウ学長は、イエズス会日本管区長として広島、長崎などに3日間同行した。そのときの教皇の印象や人柄に触れ、同書のなかでこう語っている。「赤ん坊でも、お年寄りでも、健康な人でも、病気の人でもみんなすごく親しみを感じてしまう。大勢の人を相手にしていても、一人ひとりの個人に話しかけているような印象である」。上智大学訪問のときの写真を見ても、この言葉は真実であるようだ。



右は文学部社会福祉学科3年中原徳子さん(当時)

2. 教皇と日本の青少年の対話

2月24日には、教皇と日本の若者の対話集会「ヤング&ポープ（教皇）大集会」が武道館で行われた。〈希望〉と〈愛〉と〈平和〉をテーマに、教皇との対話討論がおこなわれた。この対話には、上智大生だった奥村みささん（中京大学）が参加し「搾取や弾圧の中での愛の精神とは何か」を、教皇に問いかけた。また、司会を務めたのが、上智大学国際部出身のアグネス・チャンさんであった。この様子はテレビなどでも実況された。そのときの教皇は人生の目的と未来について、集まった7000人の若者に向かって熱く語りかけた。そのメッセージは、現在でも色褪せることのない価値を持っている。

「技術の進歩で現代社会は快楽的で自己中心的になっていますが、若者は本当の道徳的、精神的価値を追求し、世界と人間性のビジョンを確固なものにすることが大切です。そして美しい自然を守ることも人類の緊急の課題です。また他の人々、特に貧しい人、飢えている人、身体の不自由な人、病気の人、苦しんでいる人、社会からはじき出されている人に、心を開き、関心を持って接することが大切です。なぜならこのことが真の意味での自己完成であり、自分を与えることが真の生きる喜びであり、希望となるからです。さらにカトリックの信者は、キリストが人間の尊厳と人生の目的を示しているので、『何事も人からして欲しいと思うことを、あなたも他の人びとにしないさい。』という聖句（マタイ福音書）を実行することです。」そして最後にこう呼びかけた。「この世界に大きく心を開き、世界中の若者たちと手を取りあって、明日の世界を築いてください」（要約100周年記念誌編集室）



司会のアグネス・チャン(1981年2月24日)とともに

写真提供: 主婦の友社

3. 教皇ヨハネ・パウロ2世とゼノ修道士、ヒロシマ

教皇の来日には大きな関心が集まった。マスコミ各社は新聞、テレビ、雑誌などでこぞって報道した。特に朝日新聞や読売新聞では、号外まで出した。そうした中で深い感動を残したものは、長崎原爆罹災者の訪問と同じポーランド出身のゼノ修道士との対面であった。ゼノ修道士は、1930年に来日し、特に戦後の戦災孤児や貧困の廃品回収業者などの集まった「アリの町」（浅草の隅田公園の一角）で奉仕した人である。対面は感涙で互いに言葉にならなかったと、当時の新聞は伝えている。

また、ヒロシマでの全世界に向けた「広島アピール」で教皇は、平和公園に粉雪の舞う中、「過去を振り返ることは未来に対する責任をおうことです」という言葉を繰り返しながら「広島を考えることは、核戦争を拒否することです。広島を考えることは、平和に対して責任を取ることです。この町の人びとの苦しみを思い返すことは、人間への信頼の回復である」と、訴えた。核兵器廃絶を願うヒロシマの人々のこころは、教皇の「平和アピール」で全世界に伝わった。